

平成30年度 心の健康委員会事業概要

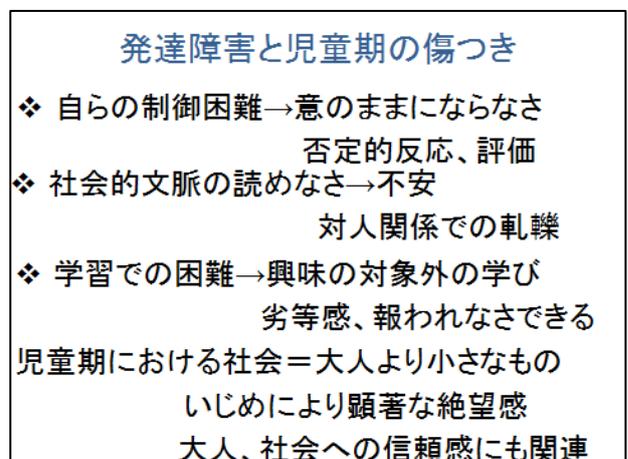
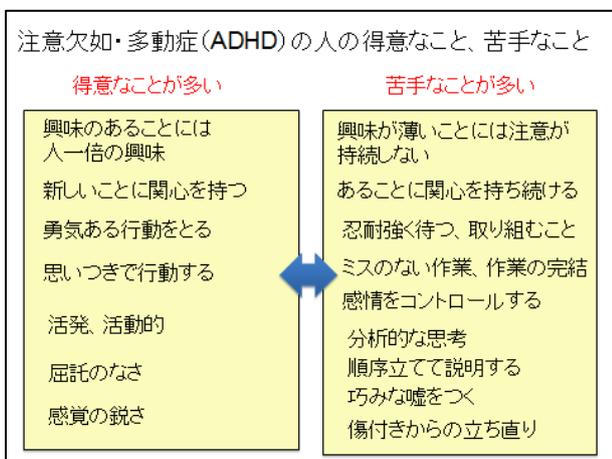
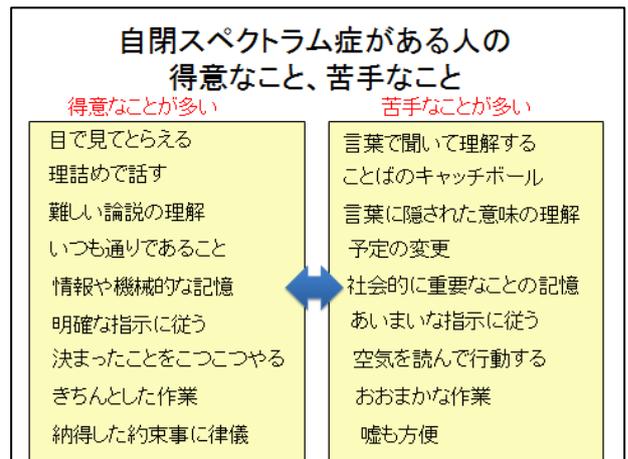
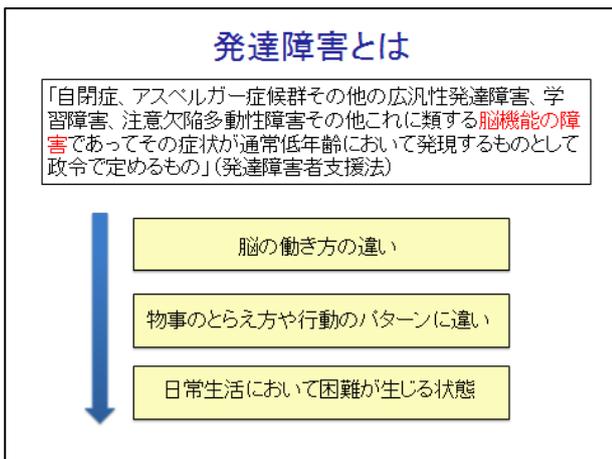
【委員会の開催】

- (1) 期 日 ・ 第1回 6月29日(金)
- ・ 第2回 11月7日(水)
- (2) 内 容 「心の健康」講演会の計画と事例研修



【「心の健康」講演会】

- (1) 期 日 平成30年11月29日(木)
- (2) 会 場 不二羽島文化センター みのぎくホール
- (3) 講 師 名古屋大学医学部附属病院
准教授 岡田 俊 氏
- (4) 演 題 「発達障害のある子の育ちと育みとその支え」
- (5) 参加者 180名
- (6) 講演概要 (資料より一部抜粋)



思春期・青年期における仲間関係

仲間にいれてもらう、一緒に遊ぶ仲間から気の合う仲間へ
自分も他の人とともにいたいという思い
異性の世話を焼いていた子が近づくにくくなる
他方では、「友情」の不確かさと不安

仲間との微妙な違和感と傷つき
期待した反応と実際のずれ
どこか受け入れられている感覚の乏しさ
調整する社会的スキルの不足

ものや活動を介したかわり
気のあった仲間との交流→得難い友人へ
「悪友」との交流、に利用されることも→傷つき³³

発達障害のある子のこころの育ち

ASD: ライフサイクルの発達課題における躓きやすさ
心理的な傷付きからの回復しにくさ

ADHD: 失敗の多さ、傷つきやすさ



自分はやれているという感覚(自己効力感)のもてなさ、
自分はこれでいいという感覚(自己有能感)のもてなさ
I am OK vs I am not OK

33

自他の肯定と否定：4つのポジション

I am OK, You are OK(自他肯定)
自分と他人の存在価値を同じように重要なものとして受容
している状態。

I am not OK, You are OK(自己否定・他者肯定)
相手のいいなりで、自分の意見を言えない。

I am OK, You are not OK(自己肯定・他者否定)
自分勝手に相手の状況を考えない。

I am not OK, You are not OK(自他否定)
自分を見失い、自暴自棄になり、希望を見出せない。

34

発達障害の発達課題とゴール

自分が愛されている、必要とされているという感覚
自分を信頼出来るのと同様に他者も信頼出来る感覚
自分のことが自分であるという感覚
自分には取り柄がある、有能であるという感覚
他者と関わっていても、関わってなくても
ありのままにいられる感覚

論破する行動スタイル→必ずしもコミュニケーション
「スキル」の問題ではない
ありのままにいられないことの問題
背後には、その人の育ちの問題

35

支援において重要なこと

- ❖ 発達障がいのある子の歩みの遅さや問題行動に焦点をあてるのではなく、発達障害とともに歩むその人を支えること
- ❖ 学校や社会に対する様々な思いを受け止めたうえで、問題を現実的に解決すること

親が当初支援に求めることと異なる

「診断の該当・非該当」「普通の将来の保証」
支援者は、周囲のニードではなく本人のペースに

支援に必要な視点：「みかた」になること

- 味方になること
(ありがちな構図)
本人の唯一の味方としての親、時には周囲と衝突
支援者が周囲の立場を批判=本人の味方に
→とりあえずの共感が示せてもそこから展開しない
敵とされている人=支援を期待されている存在
支援者には、その敵を支援者に取り込むことが
求められる
- 見方(見え方)になる
本人、親、周囲:それぞれの視点に立ってみる視点
見つめるまなざしの提供=それ自身が治療的でもある
発達障害の支援:特性に応じた環境調整に偏りがち
その人の支援=主体的な体験と選択を大切に³⁶

参加者の感想

- ・発達障がいのある児童生徒の理解を深めることができた。発達障がいのある子が家族や仲間、そして先生から『自分が受け入れられている』『周囲から必要とされている』という実感をたくさんできるような支援をしていきたい。
- ・発達障がいのある子だから…、この子だから…、ではなく、全ての子を尊重することが大切であることを感じた。生きにくさ、育ちにくさを感じさせているのは、周りの大人や環境であり、その子の「見方」を大切にしたい支援をしていきたい。
- ・発達障がいのある児童生徒の特性は様々であり、パターン化せずに一人一人に応じた支援を考えていきたい。また、「普通」という言葉について、みんなに近づけることではなく、その子にとっての「普通」を考えることが重要と感じた。